

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370850

研究課題名(和文)18世紀「国民国家化」の時代における宗教ネットワークの研究

研究課題名(英文)Confessional Trans-State Networks at the beginning of the Age of Nationalism

研究代表者

西川 杉子(NISHIKAWA, Sugiko)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：80324888

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：この科研ではトランスナショナルなネットワークが衰退したとされる18世紀後半において、小規模ながらもヨーロッパ・プロテスタントとの連携運動に着目し、イギリス、イタリア、ウクライナ、ハンガリー、ポーランドで資料調査を行った。その結果、亡命ユグノーのネットワークが、その連携運動を担い、密な連絡を保っていたことが明らかになった。特に調査対象としたJ. J. マジェンディらユグノーの子孫たちは、イングランド国教会を信奉しており、国教会の内部で、大陸のプロテスタント救済のために働きかけを行っていた。彼らの言説は、17世紀と変わらない宗教の大義を掲げたものであったが、それに呼応する人々も多かったのである。

研究成果の概要(英文)：This project examined confessional trans-state networks in the late 18th century. Although those networks were diminished by the mid-18th century, some Huguenot descendants in England still kept them alive and, when continental Protestants were under threat, tried to appeal to the British sense of solidarity with their co-religionists on the continent. For example, J. J. Majendie, a church of England clergyman as well as a Huguenot descendant, attempted to mobilise the Anglican network in order to help them. His activities show the strength and endurance of the transnational Huguenot networks. In conclusion, this project suggests that the trans-national aspects of the confessional networks in the mid-18th century certainly illuminate the continuing role of religion in the Age of Reason, but more importantly they demonstrate the persisting ties and continuing communication between historically linked but geographically or politically separated communities across Europe.

研究分野：人文学

キーワード：啓蒙 宗教 国民国家化 ユグノー ネットワーク

1. 研究開始当初の背景

これまで本研究者は、17世紀から18世紀前半にかけての近世イングランドとヨーロッパ大陸の宗教的連帯運動を考察対象として取り上げてきたが、18世紀後半の啓蒙主義と宗教の関係、そしてヨーロッパとの宗教的連関を十分に考察するには至らなかった。申請者のこれまでの研究成果は、英語圏のみならずドイツ語圏でも評価され、その一部は独語訳、オランダ語訳、フランス語訳も出ている。これまでの結論では、宗教的連帯活動は18世紀前半に徐々に縮小化し、一部の例外を除いて消滅していったというものであった。これは、18世紀後半に、イギリスの世俗化がすすんだとされ、また大西洋圏との結びつきをいっそう深化したという広く受け入れられている時代像とも合致していた。しかし、申請者は、世俗化したとみなされる18世紀後半の宗教ネットワークの変遷を明らかにしないことには、長期的視野のもとでの宗教的役割の解明には不十分であると思うように至った。

2. 研究の目的

本研究は、これまでの研究では宗教的紐帯よりも国民的結集が強まったと想定される18世紀後半の宗教ネットワークの変遷について、具体的に明らかにすることをめざしていた。すなわち、18世紀イギリスにおいて国民的結集が進行したことを認めつつ、ハノーヴァー朝期を通して存在した、汎ヨーロッパ的宗教ネットワークの変遷と再創造について検討を行った。特に、18世紀前半に比較すると少ない金額しか集められなかった、18世紀後半の、イングランド政府が関与した、大陸のプロテスタントのための義捐金募集に着目し、本格的な調査・分析を行うことは大きな手がかりになると思われた。これらの義捐金募集については、実行されたことは確認したものの、集められた金額の少なさやキャンペーンの規模の小ささから、具体的な分析は行ってこなかったのである。しかし、「理性の世紀」になって行われたこれらの義捐金募集の背景を解明することは、「理性の世紀」のなかでの宗教的役割の究明に結びつき、ひいては、文明を編成させる力としての宗教を、より長期的かつ広域的視座のもとで明らかにすることになるだろう。従って、18世紀前半と比較すると、結果としては成功したとは言いがたい18世紀後半の義捐金募集についても、その背景と義捐金募集キャンペーンを組織したネットワークを解明する必要があるだろう。

3. 研究の方法

本研究は、日本はもとよりヨーロッパでも知られていない18世紀後半のイギリスによるヨーロッパ大陸のプロテスタント勢力への支援の記録を収集し、分析を行うこと

から始まった。特に、1750・60年代に行われた幾つかのハンガリー（現ルーマニアのトランシルヴァニアを含む）やドイツ都市やヴァルド派、そしてモルダヴィア公国のプロテスタント勢力のための義捐金募集キャンペーンに注目し、キャンペーンに関わる言説分析のみならず、その活動に関わった人脈や金銭的流れの調査を、イギリスおよびヨーロッパ大陸において行った。

第1年目おこなった、ヴァルド派文書館での調査によって、1750年代60年代のヴァルド派支援には、カンタベリ大主教トマス・セッカの関与があったことを突き止めた。また並行して、同じくセッカ大主教の関与があったと思われるモルダヴィア公国のプロテスタント・コロニーの場所を特定する作業を行い、ルーマニアおよびブコヴィナ地方での（現ウクライナのチェルニウツィ周辺地域）現地調査をおこない、ウクライナのプリリプチェがコロニーのあった場所ではないかと考えるに至った。この地域は当時のポーランドとモルダヴィア公国の国境にあたる。また、現地で得られた二次文献から、このコロニーに集まったプロテスタントは、ポーランドの大貴族スタニスワフ・ポニャトフスキによって招聘されたドイツ・シュレーゼン地方出身であると判明したが、それ以上の同時代資料は得られなかった。

第2年目には、ロンドン・ランベス図書館のもつカンタベリ大主教トマス・セッカ関連の資料を調査するうちに、ハンガリー、モルダヴィア公国プロテスタント・コロニー、ヴァルド派の支援において、ユグノー子孫の活躍が顕著であることに気がつき、それを手がかりに資料収集・分析を行うこととなった。また、トランシルヴァニア（現ルーマニア）のナジエニャド、ハンガリーのデプレツェン、ドイツのザールブリュッケンがほぼ同時に、カンタベリ大主教に使節を送り、さまざまな情報提供を行っていたことがわかった。第2年目後半は、サバティカルを利用して、ハンガリーのデプレツェンの改革派神学校図書館で資料調査を行い、18世紀後半の改革派神学校の存続が、いかにイングランドからの資金援助に依っていたのかを確認できた。またイングランドにおける改革派神学校のための義捐金募集の詳細を得ることができた。

デプレツェンで得られた義捐金募集の記録は、18世紀後半の連携運動解明に役立つ貴重なものであった。特に、J. J. マジェンディというユグノーの子孫が、18世紀後半のトランスナショナルな連携運動の中心にいたことが判明した。第3年目は、マジェンディの足跡をおうことで、イングランド国教会内の組織 SPG (Society of the Propagation of the Gospel in Foreign Parts) が連携運動に関与していたことも判明した。マジェンディを始めとするユグ

ノーの子孫たちが、カンタベリ大主教の承認をえて、18世紀後半のトランスナショナルなプロテスタントの連携運動をささえたといえよう。

第3年目と第4年目は、このユグノー子孫が中心となった義捐金募集について、ハンガリーのベルクフルドゥ、英国のロンドンとケンブリッジにおいて研究発表・講演をおこなったが、大きな反響がえられた。

なお、科研期間を通して、ウクライナ語とポーランド語の資料については、福嶋千穂氏（東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・講師）のご協力を得た。また、ポーランド並びにブコヴィナの研究状況については、スティーヴン・ローウェル教授（リトアニア歴史学研究所）、グレーム・マードック准教授（トリニティ・カレッジ・ダブリン）、小山哲教授（京都大学）、黛秋津准教授（東京大学）のご助言を得た。

4. 研究成果

(1)この科研では、イギリス、イタリア、ウクライナ、ハンガリー、ポーランドにおいて、トランスナショナルなプロテスタントの連携に関する資料調査を行った。資料的には、オックスフォード大学ボードリアン図書館・イングランド銀行・ランベス図書館・ヘディングラム城・ロチェスターユグノーミュージアム（以上イギリス）、ヴァルド派文書館（イタリア）、デプレツェン神学図書館（ハンガリー）、ヴロツワフ大学図書館（ポーランド）において、18世紀後半イングランドによる連帯運動の記録を発見することができた。ただし、現在はウクライナに属するモルダヴィア公国プロテスタント・コロニーの資料に関しては、ウクライナのチェルニウツィにまで足を運んだが、郷土史家によるコロニーへの言及があったものの、一次資料は発見できなかった。しかし、これまで不明であったハンガリーのデプレツェンへの支援については、同地の神学学校図書館に置いて詳細な救援活動の資料を発見することができた。

(2)これらの資料的発見により、18世紀後半の支援活動においては、ユグノー子孫であり、イングランド国教会聖職者となったJ. J. マジェンディの活動・影響が大きく働いていたことが判明した。マジェンディは、カンタベリ大主教トマス・セッカに大陸のプロテスタントの状況について報告し、その使者と引き合わせただけでなく、エージェントを組織して募金活動を行い、新聞にその現状報告記事を執筆し、イングランド銀行に長期利子の設定を行うなど、救援活動を統率していたといえる。また、彼はカンタベリ大主教の助力により、Society of the Propagation of the Gospel in Foreign Parts 内部にヴァルド派委員会、デプレツェン委員会を設置し、ヴァルド派

とデプレツェン神学校への資金が、永続的に送られるように手配していた（現在も継続中と思われる）。これらの委員会には、ユグノーの名前が列挙されていた。その一方で、18世紀半ばまでは機能していた Society for Promoting Christian Knowledge（キリスト教知識普及協会）などのトランスナショナルな宗教ネットワークの関連団体が、世紀半ばには大陸への関心を失っていたことも確認できた。

(3)これらの調査・発見から、亡命ユグノーのネットワークが、その連携運動を担い、密な連絡を保っていたことが詳細に明らかになった。ユグノーの子孫たちは、イングランド国教会を信奉しており、国教会の内部で、大陸のプロテスタント救済のために働きかけを行っていた。特に、イングランド国教会内部の宣教組織、Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts が大陸プロテスタント救援のための中心組織として、ユグノーの子孫たちに利用されていたのは大きな発見であった。彼らの言説は、17世紀と変わらない宗教の大義を掲げたものであったが、それに呼応する人々も多かったことが判明した。18世紀後半のトランスナショナルな連携は、それ以前の時代に比べると小規模にはなったが、逆にイングランド化したとされるユグノー子孫のネットワークの強靭さがあきらかになった。今後は、これらイングランド化したユグノー子孫のイングランドにおける影響力をあきらかにしていく必要があるだろう。

(4)本研究の成果は、海外の学会における3つの招待講演（2015年4月ハンガリーの International Calvinism: A Unity in Diversity?, 2015年9月ロンドンでの第6回ユグノー国際会議、2016年10月ケンブリッジ大学における Converting Europe: Protestant Missions, Propaganda and Literature from the British Isles）において発表した。いずれも大変、大きな反響が得られた。ユグノー国際会議の成果は、2017年夏に出版される予定である。ケンブリッジ大学での報告の出版については、現在、会議主催者が出版社と交渉中である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

西川杉子「理性の時代の宗教改革」『福音と世界』査読無、6月号、2017、pp.40-45

〔学会発表〕（計6件）

西川杉子「理性の時代の宗教改革運動」第6回 ヨーロッパ中世・ルネッサンス・

宗教改革勉強会、東京 YMCA 会館、東京都千代田区神田駿河台、2016 年 11 月 26 日

西川杉子「近世における在外イングランド国教徒の礼拝」国際商業史研究会 例会、東京大学、駒場キャンパス、東京都目黒区駒場、2016 年 10 月 29 日

Sugiko Nishikawa, 'Uniting a Protestant Europe: the SPCK and its Networks', Converting Europe: Protestant Missions, Propaganda and Literature from the British Isles (1600-1900)、於ケンブリッジ、英国、2016 年 10 月 1 日

Sugiko Nishikawa, 'Maintaining the Protestant cause in the Age of Reason: English relief activities for Continental Protestants in the 18th Century', 6th International Huguenot Conference、於ロンドン、英国、2015 年 9 月 11 日

Sugiko Nishikawa, 'English Relief Activities for the Hungarian and Transylvanian Protestants in the Late Seventeenth and Eighteenth Centuries', International Calvinism: A Unity in Diversity? Interactions between international and national Calvinism(s) during the éra of liberalism and totalitarianism、於ベルクフルドゥ (Berekfürdő) ハンガリー、2015 年 4 月 15 日

〔図書〕(計 3 件)

Sugiko Nishikawa (分担), Routledge, Huguenot Networks, 1550-1750: The Impact of a Minority in Protestant Europe, 2017, chapter 13. (2017 年 8 月 10 日刊行予定)

Sugiko Nishikawa (分担), Routledge, Religious Interactions in Europe and the Mediterranean World: Coexistence and Dialogue from the 12th to the 20th Centuries, 2017, chapter 7. (2017 年 6 月 7 日刊行予定)

Sugiko Nishikawa(分担), Routledge, New Worlds? Transformations in the Culture of International Relations Around the Peace of Utrecht, 2017, pp.113-127.

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
国内外の別 :

取得状況 (計 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
取得年月日 :
国内外の別 :

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1) 研究代表者
西川杉子 (NISHIKAWA, Sugiko)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号 : 80324888

(2) 研究分担者
()

研究者番号 :

(3) 連携研究者
()

研究者番号 :

(4) 研究協力者
()